

手応えを求めて

——全カリ総合B群への期待——

佐々木研一

「総合講座」が一般教育課程に登場するのは1970年度に遡る。「キリスト教と文化」,「哲学」といった科目名の下,分野の異なる教員が同時に授業に出席する形態で始められたという。

いま「総合講座」は一般教育課程における27年の歴史を閉じ,97年度から新たにスタートする全学共通カリキュラム(通称「全カリ」)「総合教育科目」の「総合B群」(通称「総合B」)科目として再出発を待っている。

新機軸はコマの手当等が増加することと,全学で企画運営するためより多くの教員が関わり,内容が多彩となるばかりか,従来の科目イメージにとらわれず,公開講演会や学外活動などを広く取り込み,学生の多様なニーズによりきめ細かく対応する点である。

コマ手当が1科目1コマから3コマへと増加し,これまでなかった非常勤コマが最大3コマ利用でき,本格的総合科目として認知されることは画期的である。なお,各3コマ中1コマはコーディネーターのために確保される。

また,短期の外来講師の方々にも,非常勤コマ枠を部分使用する形で,約13,000円/90分授業(税・交通費込

み)が支給されるので,担当者選任の範囲を学外者にまで広げることができる。

それにしても,まともな手当なしに常時複数教員が授業に出席するスタイルの「総合講座」が30年近くも消滅しなかった理由は何であったのか。一つには,学生と教員たちが混ぜこぜになり,筋書きのない双方向のやりとりを行う際に得られる,ある手応えが「コマ持ち出し」を忘れさせたのではないか。

初めて「総合講座」に参加したときのあの鮮烈な印象を思い出す。それは横山紘一氏をコーディネーターとする7名チームによる「東西思想の対話」という科目であった。

講義を教員同士聴き合うこともさることながら,シンポジウムでは,ともすると学生そっちのけで教員同士が意見をぶつけ合った。これは学生には新鮮な驚きであったようだ。つまり,教師のいうことをずっと疑わず受け止めてきた彼らが,何を正しいとするかは自分で決めなければならないと知ったからである。

この授業風景は「先生の言うことが

本当とは限らないと悟りました」という表題で雑誌「立教」145号（1993）に三浦雅弘氏が活写しておられるので、まだの方は是非御一読をおすすめする。

討論の時間には何が起きるか分からずわくわくした。他の6名の教員の講義を聞くのも楽しかった。討論を通じての学生の反応もすばらしかった。三浦氏の書かれたものを読みなおすと、未知の世界へ飛び込んだあの時の印象が蘇る。これこそ「総合講座」が消滅しなかった大きな理由であると確信する。

さて、いま私は一般教育課程最後の年の「総合講座・東西思想の対話」のコーディネーターを務めている。来年度総合Bでも展開する「科学と人間」をテーマとし、担当者は表1に示すように、登場順に、化学の私、物理学の山本博聖氏、法律学の所一彦氏、哲学の佐々木一也氏、医学の篠田知璋氏、そしてゲストとして、デス・スタディーに取り組むジャーナリスト若林一美氏、宗教哲学の永見勇氏の7名である。ゲスト以外は出張時などを除き毎回出席する。

学年始めに表1の年間スケジュールを渡し、まず教員の自己紹介から始めた。授業では毎回コメントカードを配り、質問や意見を任意に提出できるようにしているが、初回のカードには、この1年に対する様々な期待▽科学的基礎知識を得て議論できるようにな

りたい▽哲学的アプローチへの期待▽本当の幸せてなんだろう。1年間の授業を終えて答えを出せるようにしたい▽科学への懐疑と期待▽教員の生い立ちを聞くという滅多にない機会を得て授業への姿勢も変わる。専門の話よりずっと面白そう…などの反応が見られた。

続いて4回にわたり、科学と生活との関わりについて、ベネフィットとリスクを念頭に置き具体的に山本氏と私が講義した。

これに対するコメントカードは、任意提出であるが、多いときは出席者100～110名の4割が提出し、次の授業で全部はとても回答できないほどであった。科学を素直に受け入れたいという学生と、批判的に受け止める学生に分かれた。

私に対しては科学に懐疑的すぎるとの批判が出た。科学技術が際限なく独走する様相への危惧を私は強調しすぎたかもしれない。途中からできるだけ中立な表現を取るようにつとめたが、それがまた問題となった。学生は敏感に反応した。結果よりこうしたやり取りから各自が何かつかんでくれればよいと思いつつも、本当は動揺を隠せない。

どうも、かつてのコーディネーター横山氏にはうまく行かない。協力者として参加していた時は気楽に好きなことを言っていたが、コーディネーターとなるとまるで違う。誰もが気楽に討論できる雰囲気維持する

役は、諸々を受け止めて動じないゆとりを持たねばならない。私は出たとこ勝負のありのまま主義が好きだが、それを一步離れ、外から眺めるもう一人の自分が欲しかった。授業前の大まかな筋書き作りの準備作業は全行程の3割程度であり、残りは教室で学生と向かい合ってからのものである。

初めてチームを組む教員間の遠慮を早く取り払うことも重要である。また昔話だが、横山チームは全員一般教育部教員であり、普段からいいことを教授会の席でもどこでも言い合っていたので、その心配は授業の最初からかけらもなかった。

私たち96年度チームは前年12月から数回の打ち合わせをやり、互いに講義内容を紹介し合った。骨格になる項目やキーワードを並べ、簡条書きした資料は、少し肉付けすれば講義資料として配付できる詳しいものが多かった。しかしあまり中身を知りすぎでは新鮮味が薄れるので、後は本番に譲り準備を終了した。

いま、体当たりの一年を振り返ると、大きな実りはあったが、私の至らなさからの反省項目の方が先に思い浮かぶ。

できるだけ多くの討論時間を学生に与えようとしたため、教員の自由な意見を述べる時間が足りなかったようだ。教室での教員間の生の意見交換がもっと多ければ教員間の遠慮もさらに減ったと思われる。

授業の討論時間はいくらでも欲しい。まだ話し足りない面持ちで部屋を出る

学生がいた。授業に続く昼休みの半分以上を、残った学生と話し続けたことも幾度かあった。その一方で、大部分の学生が一言も発言せずに教室を去ることをどうすることもできなかった。

学生は討論に慣れていないので、ごく普通の語法でも食い違うことが度々あった。たとえば「偶然」がほとんど「必然」の意味に使われたこともある。気付くまでに時間はかかるが、話し手も聞き手もこのような経験から討論の仕方を学ぶのだから、討論の機会をできる限り多くし、慣れるしかない。

反省ばかり並べているが、ここで私は総合Bが大変だと言うつもりはない。これらは私の非力故の結果であり、一般には取るに足らぬ悩みであろう。これから担当を計画される方は、あまり気にされないことを願う。学生の反応と発言が授業を発展させてくれ、手応えは十分にある。

ところで、学生には何を提供すればよいのだろうか？

学部教育は基礎教育である。専門も教養科目も最終的には自分の中で総合化しなければならない。

総合Bはそのプロセスのきっかけを作る作業だ。真面目に考え議論することにシラケている世代に考えさせることが狙いである。総合Bはその道しるべとなり、在来科目のセクショナリズム打破の突破口となりうる。

そう考えて準備して臨むが、なかなか伝わらない。他の教員の講義中、後

ろ寄りの席に座り、学生たちを観察すると、机の上には授業と関係のないものが堂々と広げられている。出席していれば単位は出るだろうという安易な学生がかなりいる。学生にそうさせているのも教員の責任と考えると、いったい何をどう提供すればよいのかわからない。

熱心な学生の相手となることはそう難しくはない。問題は、どこかで熱意を失ってしまった学生たちに何を提供し、どう呼び戻すかである。

学生は卒業までに124単位以上を取得せねばならない。課外活動やボランティア活動に精を出せば単位取得は苦しい。入学の目的が多様化し、学んだことと就く職業の関連が希薄で、企業の期待と学生の学び取った中身が剝離している現在、卒業の仕方も多様であってよいのではないか。

なぜ一律に124単位か？ 取得単位の中身は十分濃いか？ 学生に聞けば、本当にためになり聞きたい科目は1割程度しかなく、かなりの学生が一般教育・専門に関わらず楽勝科目に殺到するという答えが返ってくる。

総合講座の受講生ではないが、私が毎回出席を取っていることに疑問を持った学生がオフィスアワーに訪れた。「集中して聞こうとしても興味を持って苦痛なのに、出席で縛るのはおかしいではないか」と言う。私は100%出席しなさいとは言わないし、そういう人にこそ何とか興味を持たせようと腐心してきたつもりだが、成果が上がっ

ていないことを知らされた。

彼は多人数を抱えるA先生は理解があると言った。指定のレポートを出せば授業には出なくてよく、あとは試験次第ということだ。一瞬耳を疑ったが、似たような例を思い出した。ある大教室で授業が終わり、片づけていたときのことである。次の学生がちらほらとしか着席しないので聞いてみると精々30名程度だという。次の私の授業の教室は座席が足りないので教務課にその大部屋と交換できないか問い合わせた。しかし答えは、あの授業の登録数は800だそうです、ということだった。

人数が多いからこうなったのか、こういう授業だから人数が増えたのかは知らないが、誰かがこうして空の単位を出さなければ124単位を取得できないのが現実である。

中身のない授業と、不十分な環境と、相当数の学生の無気力との相乗作用の結果として、楽勝科目で仕方なく単位を埋めるという作業は時間の浪費である。こうして送り出される大卒を社会も半ば諦め気味に受け入れて来た。このパターンにメスを入れるのが大学改革の中心課題のはずである。

124単位のどれほどが空洞化しているか不明であるが、空洞化しても卒業要件単位を埋めなければならない制度も問題である。

いっそ124単位制度を止めたらどうなるだろう。無論必修科目などなくす。本気で勉強できる科目だけを取り、一定期間が過ぎるか、取りたい単位を取

り終われば卒業できることにする。浮いた時間は心おきなく課外活動などで充実させる。

単位取得数が減少するから教室にゆとりができる。癌ともいふべき楽勝科目をなくすことはできないが、一方で、授業内容を格段に充実させることが可能である。成績もさじ加減なく本当の評価ができる。企業は成績表を軽視しなくなる。単位が少ないと思う学生は在学中の他の活動をセールスポイントとして売り込めばいい。

そのようにしても学生生活の実態、すなわち本気で勉強する時間に関しては、勉強したい学生もその他の学生も今と変わらないだろう。ただ無駄に出席する時間がなくなるだけでした。ただし、現在の手抜き勉強でもやらないよりはよいとなれば話は別であるが。

授業から本気で何かを得ようとする学生を増やす努力を怠る、このような見切り発車の思想は本末転倒だが、教育の中身がいつまでも変わらないのなら、「大綱化」をさらに拡張し、卒業要件単位の自由化まで考えたくもなる。

教育は制度では変わらない。教室外で制度改革をやっても最後は学生と教員が教室で向かい合う。学生はそこで制度ではなく授業内容とそれを準備した教員を見る。最後は人の問題になる。

自分にはお鉢が回ってこなければよいと思う人が多い中で始まる全カリ制度は、可動な人を中心に維持されるだろうからマンネリ化の危険をはらむ。

そうさせないためにはできるだけ多くの教員が関わり、絶えず変化を持たせる努力をすることである。目玉の総合Bでは、同じテーマと担当者との組み合わせを2年続ける（半年単位で4回の繰り返し）のが限度であろう。学生が入れ替わっても、議論の流れは次第に読めるから、担当者は新鮮味を感じなくなり授業から活力が失われる。選手交代が必要である。どの学部においても、いつかは皆コーディネーターをやらざるつもりでいなければならない。

本年度の授業に話を戻す。最後のシンポジウムのテーマは「科学と幸福」だった。ところが、学生からは先ず全カリに関する質問が相次ぎ本題に入れない。私の進行が下手なせいもあるが、全カリに対する学生の関心はことの他高い。ここに集まる発言者だけが特別なのではないだろう。カリキュラム改革の初期から、もっと学生の声に耳を傾けるべきだったと感じた。

本題に移ったのは残り30分頃であった。十分討論できないままほとんど終わる頃、ある学生が「火星に人が住めると思いますか」と質問した。人口問題の解決策として考えたという。私はコストを十分かければ不可能ではないが人口問題の解決にはならないだろうと答えた。佐々木一也氏は人間が科学に使われてしまってはならないのであり、そのようなことを考えるべきではないと主張した。別の学生からも、火星でも同じ問題が起き、問題が先送り

されるだけだ、という発言があった。

この授業の1年間の終わりに、こういう質問を堂々とできたことは、質問者が自分を見失っていないすばらしいことかも知れない。科学は幾度も不可能を可能のようにしてきたから、重力が異なり、酸欠で二酸化炭素だらけの、マイナス数十℃の現在の火星環境に人が住めないと誰が断定できよう。科学に秘められた計り知れない可能性を人間の欲望が際限なく引き出そうとすること、そしてそのよい影響も悪い影響も限りなく広範囲に及ぶことも事実だ。その御し方はその時々人間が考えていくしかない。彼の質問は私には少なからずショックであったが、未来は私より彼らの世代により重くのしかかっているし、私の気付いていない

何かをすでに彼らは未来から感じ取っているかも知れない。

この授業の目的は結論を導くことではない。彼らにより大きな将来の選択権があることを考えると、教員は基本的なことを言うだけ言ったら沈黙すべきなのかもしれない。

総合Bには決まったやり方はない。強いていえば、シナリオのないところで、学生と教員が共同で作り上げていくものである。その成果はそこに居合わせたものたちだけが、互いに手応えで確認し合うものであろう。

(ささき けんいち 本学理学部教授、
全カリ自然科学教育研究室員)

[表1] 1996年度予定表, 学生に配布

東西思想の対話 1996

— 科学と人間 —

講義予定

月/日	テーマ/内容	主な担当者	備考
4/11	ガイダンス	佐々木 ^研 他	
18	科学と私 (教員の自己紹介を兼ねる)	全員	
25	電子/情報機器と人間	佐々木 ^研 , 山本	パソコン, インターネット, 自動装置, 人工知能
5/2	—休講—		—連休前日—
9	化学物質とリスク	佐々木 ^研	安全は保証できるか
16	科学技術と環境問題	山本, 佐々木 ^研	人間活動, 廃棄物, 環境汚染・破壊
23	巨大科学技術 (1)	佐々木 ^研	誤りの許されるシステム, 「もんじゅ」
30	巨大科学技術 (2), 宇宙と人間 授業時間内試験 (30分)	山本	ロケット, 人工衛星
6/6	シンポジウム「科学への期待と現実」	全員	
13	法で何をまもれるか	所	科学の発達に伴う規制, 法の働き
20	専門家と素人 (テクノクラシー)	所, 佐々木 ^一	科学による素人的市民の支配
27	科学教育	佐々木 ^一	生の観点で技術を選択できるように
7/4	シンポジウム「科学をいかに使いこなすか」	全員	
11	前期末試験 (授業時間内, 50分)	佐々木 ^研 他	
月/日	テーマ/内容	主な担当者	備考
9/19	医療と心	篠田	従事者と患者の心身相互作用
26	脳と心	所	精神の物質的基礎
10/3	医療技術と生命倫理	篠田, 所	臓器移植と脳死, 尊厳死, 現代の出産
17	免疫力による防御, 病人の環境	篠田	
24	Bereavement and Grief	ゲスト: 若林一美氏	
11/7	遺伝子の組み替え 授業時間内試験 (30分)	佐々木 ^研 他	進化の仕組みと意図
14	シンポジウム「医学/医療に何を期待するか」	全員	
21	自然と人為	佐々木 ^一	自然とは, 人は自然でないか, …
28	科学と宗教 (1)	ゲスト: 永見勇氏	
12/5	科学と宗教 (2) ミニシンポジウム「科学と宗教」	ゲスト: 永見勇氏 佐々木 ^研 他	宗教現象の多層性, 科学の意味 宗教と科学の関係の変遷過程
12	人間にとっての科学の意味	佐々木 ^一	創造し欲望を満たし矛盾に追い込む
19	シンポジウム「科学と幸福」	全員	
1/9	学年末試験 (授業時間内, 50分)	佐々木 ^研 他	